海の研究 (Oceanography in Japan), **16** (4), 313 – 318, 2007

— 寄 稿 —

海の短歌集 *

川合 英夫 †

要 旨

本報は，ほとんどすべて海の短歌集–日本語の伝統的な詩歌集であり，(1) 水産海洋などに係わる自作自選の短歌集，(2) 黒潮百葉集という多くの作者によって詠まれた黒潮短歌 54 首，6 部類の収録集，(3)「黒潮と日本人」を標題とする小論の 3 部分から成る。周知のように，短歌は字余り字足らずの場合を除き，原則として 5, 7, 5, 7, 7 音節からなる五句によって構成されている。また，短歌は自作品の詠み方ばかりでなく，他作品の読み方つまり評価の仕方も難しいため，筆者による他作品の『黒潮百葉集』への収録は恣意的であるかもしれない。しかし，水産海洋や黒潮に係わる短歌に関するかぎり，筆者は特異な経験を重ねてきており，感性に係わる面はさておいて，日本での「海の研究」の人文社会的側面を捉えることに本報は寄与できるのではないかと信じている。

キーワード：海洋短歌, 水産海洋，黒潮，黒瀬川，人文社会的側面

1. 水産海洋などに係わる短歌集 (自作自選)

掲載誌名に付した♯は，掲載誌に発表された短歌が少し推敲されたことを示している。

そそり立つ波かはしたる眼の前に逆巻く波のまたそそり立つ

2002 年 11 月 NHK 歌壇

わだつみの声は千尋を湧き昇り黒潮の辺に逆巻きにけり

辺: へ

2005 年 3 月 NHK 歌壇♯

澄み透る黒潮に船入りたるか鰹曳縄たぐる音繁し

2005 年 4 月 NHK 短歌

夢にまで想ひ浮かべて論証の二転三転ようやく解けたり

2005 年 7 月 NHK 短歌♯

果てもなく愁ひ奏でるロ短調「未完成」にてあるが相応し

2005 年 12 月 NHK 短歌

月落ちて漁火青く映ゆるとき棒受網にサンマきらめく

冬さなか津軽海峡一本釣りマグロ手繰りて銛を打ち込む

満ち干きは海たがやして命うむ形さまざま色とりどりに

延縄を繰り出し終えて空しらむ暫しまどろみ大漁またん

腰ひもを結はいて退がる地引網なむら閉じ込め海底さらふ

結: ゆ，退: さ，海底: うなぞこ

三十一は音の調べを詠まざれど心の調べを映し尽くさん

三十一: みそひと，詠: よ

共振する波さながらにマーラーの第四は天のなぎさに響く

感性は歌の心に光るもの我が曇れるを如何に磨かん

2. 黒潮百葉集 (黒潮短収録)

http://blogs.dion.ne.jp/kawaihid/archives/207481.html

「黒潮を写し，黒潮に係わり，黒潮に托し，何を想い，何を感じ，何を嘆ずるか」は，人それぞれに異なるだろう。そ

*2007 年 2 月 22 日 受 領；2007 年 2 月 24 日 受 理.
著作権：日本海洋学会, 2007
†〒 610–0102 京都府城陽市久世芝ヶ原 131–81
著者 e-mail address：kawaihid@leto.eonet.ne.jp

れゆえ「黒潮」,「黒瀬川」, 黒潮を象徴する語句などを在るがままに詠み込んだ短歌を, この『黒潮百葉集』に収録した。万世にも伝わるような秀歌を収録するのに, 百葉集という名前はそぐわないかも知れないが, これは収録者の歌道未熟を憚る心境が反映された結果として了承されたい。なお, 詠み人の名の後に記した括弧内の数字は, 作品発表時や作品成立時を表す。

以下の黒潮短歌を主要な詠み込み対象により以下の 6 部類に分けてみた。

A. 海洋現場での黒潮を扱った自然叙景詠 8 首
B. 黒潮主流に隣接すると思い込まれた沿岸や浅海での抒情叙景詠 18 首
C. 鰹や鰹漁を扱った「かつを」題詠 3 首
D. 戦没者鎮魂, 時代展望, 社会風刺, 地球温暖化などを扱った社会意識詠 9 首
E. 黒潮の流れに反映させた相聞詠 3 首
F. その他, 黒潮に係わる連想象徴詠など 13 首

各短歌の冒頭に付したアルファベットは上記の分類基準を表す。上記の 6 部類とは異なった設定もあり得る。また, 解釈を変えれば或る一首を別の部類に属させることも, さらに複数の部類にまたがって属させることも考えられるが, 筆者の解釈で一首に一部類を当てて分類した。

以上に収録した総計 54 首は, 印刷文献などによるものと, ウェブ検索によるものとからなる。上記の分類結果で, A の部類の歌が意外に少なく, B や F の部類の歌が多いのは, 一般の方々が黒潮現場に赴く機会が少ないためと, 陸地が全く見えない絶海の船上では黒潮の流れが感覚知され難いためではないかと思われる。また, 黒潮主流が本土の海岸にじかに接するような印象を与える表現が B の部類などの歌で多いのは, 一般の方々に対する黒潮の流れの実態についての普及活動が十分でないことを物語っている。黒潮短歌はまだまだありそうだが, ウェブ検索だけではとても発掘しきれない。誤記や収録もれなどがあれば, E メールアドレスあて連絡をお願いしたい。川合英夫のホームページ (www.leto.eonet.ne.jp/~kawaihid) も御覧あれ。

2.1. 鳳 (与謝野) 晶子 (1901/5),『みだれ髪拾遺』より,「明星」12 号に掲載

E [朱絃]

紀 (伊) の海をひがしへわしる黒じほに得たる思ひの名にかりし恋

安川 里香子編の注釈 (角川文庫クラシックス, 1956) によれば『みだれ髪拾遺』三版 (1904/9) で「紀伊」から「紀」へ改訂されたとされている。

2.2. 宇田 道隆 (1929–1936?),『海の心・歌句集』(1980/12/10, 星書房, 256 pp.) より

B [串本海中公園]

微かなる陽のさす底ひ黒潮の花咲くさんご錆裏の海

B 月夜にもしるけく浜木綿の咲き匂ふ黒潮の岬ひとり歩める 浜木綿: はまゆう

A [昭和四年蒼鷹丸乗船調査]

稲苗場という孤つ岩あり夕づきて潮目著けく黒潮に立つ (1929) 稲苗場: いなんば, 孤: ひと, 著: しる

F 夜も昼も激ち流るる黒潮の潮目に集ふいのちをぞ思う (1929?) 激: たぎ, 集: つど

C 黒瀬川流るる真中に相逢ひてかたみに喚び合ふかつを釣船 (1929?) 喚: よ

A [三宅島]

黒潮に浮かぶ島山木々の芽に朝日輝る道牛長鳴ける (1930?)

A 牛乗せて黒潮の中を航くところ夕日に浮ぶ島影潮文字 (1930?)

A 目路の限り渦巻き流る黒瀬川浮べる藻蔭に秘めし鰤の仔 鰤: ぶり

C 黒潮に木付魚群釣り終りデッキ打つかつをの音つひになし (1936?)

なお, 宇田が 1977 年宮中歌会始で召人として詠まれた短歌 "金華山沖にしるけき潮すぢをいるか群れ飛ぶ夕焼の海" がこの「黒潮百葉集」に収録さていない理由は,「黒潮」や「黒瀬川」などの語句が詠み込まれてないことによる。

2.3. 高村 光太郎 (1931), 宮城県唐桑町御崎に歌碑あり

F 黒潮は親潮をうつ親潮はさ霧をたてて船にせまれり

2.4. 大八木 義雄 (1936), 生駒 實 (1940) 編『海の和歌集』(日本郵船株式会社船客課, 292+11 pp.) より

A [海上雲遠]

くろしほのながれに影やうつるらむ志摩の浪切のおきのうき雲 浪切: はきり

2.5. 与謝野 晶子, 平野 萬里 (1949/7/25)『晶子鑑賞』(三省堂) より

F 黒潮を越えて式根の島にあり近づき難し幽明の線 (1937?)「冬柏」1 月号より

D 子が船の黒潮越えて戦はん日も甲斐なしや病する母 (1942/1)

2.6. 下村 海南 (宏)(発表年不祥), 生駒 實 (1940) 編『海の和歌集』(日本郵船株式会社船客課, 292+11 pp.) より
A [台湾最南端ガランピー]
日の本のみんなみのはしに吾立ちてふりさけ見れば黒潮をどる

2.7. 湖庵 (1970/1/1), 白鑞金's 湖庵より
F 極東のバルカンならし首里の島かぜのたよりも猛き黒潮

2.8. 小田 観蛍 (1973),『小田 観蛍歌謡集』(新墾社) より, 宮城 謙一・碓田 のぼる編『短歌文法辞典』(1985, 飯塚書店, 315 pp.) 参照
A 黒潮の落速いよよ荒ら渦のみなぎるひびき空にいざよふ

2.9. 牛込 恒 (1994)
B [春の旅にて]
紀の国の南縁山塊海面す黒潮近し渡来のロード

2.10. 伊藤 一彦 (1997/7/5),『森羅の光』(本阿弥書店) より, 「NHK 歌壇」1998 年 2 月号参照
D 南より来てゆたかなるさきはひをもたらす黒き巨きをろちよ

2.11. 川合 英夫 (2007/2/3), 2.10. への [返歌]
D さきはひに代はり台風もたらすは黒きをろちの警世なるかも
Project マッコウクジラ (1997) 結社国民文学」に発表
B 黒潮が届く室戸の港町ハイビスカスの紅にあふるる

2.12. 楠本 郁之助 (1998/春), 清風高校短歌集「鈴虫」, 先生の短歌より
B 黒潮の流れに添はぬ一筋の熊野逆流故郷の海

2.13. 磯田 ひさ子 (1998/12),「地中海」12 月号より
B 岩百合のひとすぢのしろ黒潮の怒涛を抑え切り岸に立つ

2.14. 小黒 世茂 (1999/2),「歌壇」2 月号 (本阿弥書店) より
D 幾千の眼のまへに黒潮はをとこを戦へおくりたる路
眼: まなこ, 戦: いくさ

2.15. 後藤 人徳 (1999–2004), 人徳の部屋, 各年度の歌集より
B [真秀 (まほ) ろば]
黒潮のゆたかに寄する海の辺の大きなホテルも廃業となる (1999)
B [峡の山里]
黒潮のひたと寄せいる海原の闇を切り裂く灯台の灯は (2000)
D [祈り]
新しき時代は来るや黒潮の蛇行激しき海原を見る (2004)

2.16. 窯元 鉄艸先生 (2000/秋), G-SALAND 俳句川柳和歌狂歌より
F [土佐のお方へ]
黒潮は山白く染めぬ暖かさをもたらすとされる大らかなもの

2.17. 加茂 洋行 (2000/秋), G-SALAND 俳句川柳和歌狂歌より
F [返歌]
黒潮は秋の実りをもたらせど京の便りを留まらせるかな

2.18. 吉田 恵子 (2000/12/10)
B [室戸岬]
空海の神秘にふれた御蔵洞黒潮踊る土佐の荒海

2.19. 風間 祥 (2001/3/17), 月光遊魚『IT 歌会の記録「眩惑」』より
F [手紙の場面]
絵葉書の余白に滲む海の色桜前線黒潮育ち

2.20. 小松原 康生 (2001), 真清短歌会誌「蒼原」1, 3, 5 月号 (?) より
B 黒潮の海をへだてる岬昏れ相呼ぶごとく灯台ともる

2.21. 林口 僥子 (2001/8),「水甕」8 月号より
E 肩とかた触れてめはり寿司つまみつつはるかな距離黒潮の青
B み熊野をめざす歩みにひたひたと黒潮にをどる光打ち寄す
F 渦紋なす黒潮近き岩上に鬼となりたる人間ゐしか

2.22. 中川 清彌 (2001), 平成 13 年度那覇市世界遺産短歌大賞全国コンテスト入選
B 黒潮の高鳴りに似し昂ぶりが首里城跡に立てば沸きくる

2.23. 素蘭 (2001/12/8),『素蘭短歌集』より
D 黒潮は滔々流る水底に母父恋ふる霊をとどめて
母父: おもちち

2.24. 径 (2001/12), 種蒔掲示板より
B 冬も菜の花咲くふるさと房州は山さへなだらに黒潮に入る

2.25. 田茂 総介 (2002/11),「NHK 歌壇」11 月号より
A [波]
黒潮をよぎるとアナウンス聞きながら波の夜を行く八丈島へ

2.26. 杜沢 光一郎 (2003/3),「コスモス」3 月号より

F［潮にほひたつ］
親潮と黒潮よりあふ潮の目かしづけき沖のひとすぢ光る

2.27. 玉木 茂子 (2003/3),「地中海」3 月号より
B［四国遍路］
黒潮の明るき海と柑橘の匂ふ伊予路の遍路となりて

2.28. S. 不一 (2003/4/27), 幻視短歌協会より
F 黒潮に遊ぶ人魚の翻り逆光に浮く影のさまざま

2.29. 瓜生 ゆき (2003/5/4)
F 泣くならば黒潮に乗れこいのぼり柏餅すら目に入らねば

2.30. 麦秋 (2003/5/12), 吟遊詩人麦秋, 夢の旅人より
B 黒潮の響く紀の国うまし丘いま花橘さかりなりける

2.31. マイミ (2003/12/16), MUSIC LAND より
E 黒潮に流され着いた恋路浜椰子の実のごと辿りつきたし

2.32. 麦秋 (2004/2/3), 吟遊詩人麦秋, 夢の旅人より
B 房総は高き山なき国なれど黒潮洗ううまし国なり

2.33. 矢野 裕子 (2004/3),「地中海」3 月号より
F 帯なせる黒潮の海が浸せしに夜は研がれていて遥かなり

2.34. 大島 安徳 (2004/4/12), 第 8 回「しきなみ新人賞」入選
C［海さんさん］
鰹追うわれは海人行きゆかば黒潮のはたて神やおわさむ

2.35. 森田 純一 (2004/6/29), エコログより
F［海］
金銀に照り映える星黒潮の藍より深き波の間に間に
D［海］
黒潮にのりて攻めゆく倭寇とはわが故郷の祖先なりしと
D［海］
南西の道の島とは黒潮の旅人どもがよくぞ名付けり

2.36. りっぷ (2004?)
D［パチンコのうた］
息ひそめそっと見守る黒潮の果てに溺れし深海の底

2.37. うりぼう 家人 (発表年不祥), うりぼうの部屋より
B［室戸］
あらあらと黒潮荒らぶこの岬黄の汐菊が岩陰を這う

2.38. 升水 昭夫 (2005/7)
B 黒潮のうねる岬の鼻に立ち南風に真向ふ初夏の朝

南風: はえ

3. 黒潮と日本人

古代から日本人やアジア人は黒潮に遭遇していたはずである。例えば, 日本書紀の推古紀には, 620 年秋, 屋久島の住人二人が伊豆諸島に漂着したと記されている。黒潮の主流は屋久島のすぐ南側を通ってから, 伊豆諸島を西から東へ横断していることなどから, この漂着はかなり黒潮の影響を受けていたものと思われるが, 黒潮や海流への言及は書紀などには皆無である。これは風による船の漂流では対水速度があるのに, 海流による船の漂流では対水速度がなく, 陸や島が見えない絶海の漂流船上では, 海流による漂流が感知され難いためだろう。黒潮に相当すると言い伝えられて来た落淤や尾閭を漢籍に探し求めたり, その他の和漢洋の漂流記・古地図・地誌などを調べたりして, 黒潮海流像の歴史的変遷について以下の推論に達した。

ごく小規模な局所集中流型の流れを指す黒瀬川やクロシホという伊豆諸島付近の土着語が, 江戸時代中期に僻地情報に好奇心を抱いていた庶民の間に広まった。その後, これらの言葉は長さ 150〜400 km の規模の中域集中流型の流れを指すようになった。他方, 幕末から明治時代にかけて西洋人が描き出した黒潮海流像は極めて幅の広い広域分散流型を示し, 昭和初期の 1930 年頃になって漸く日本人が, 幅の狭い広域集中流型の現代的な黒潮海流像を認めるに至った。さらに, 房総常磐東方沖で広域集中流型の黒潮海流像が認められるようになったのは, 戦後の 1952 年以降のことである。こうした黒潮海流像の変遷には, 航海・海洋観測など諸技術の発達が係わっていたが, さらに, 海流観や日本文化の影響も見逃せない。海流観の例としては, 中国の『元史』から窺える落水流的海流観, 近世日本での断片流的海流観, ギリシャ古典からも窺える西洋人による循環流的海流観などが挙げられる。

これまで「黒潮」という名称は, 戦時中には『太平洋行進曲』にも歌い込まれて, 戦意高揚のために利用され, 戦後には観光案内や宅地販売のキャッチワードとして, 一部では誇張こじつけ気味に利用されてきた。他方, 黒潮が繰り広げる雄大かつ自然のままの営みに, 日本人が魅せられてしまったことも確かだろう。その現れとしてか, 上記に収録したような黒潮や黒瀬川などを詠み込んだ多数の短歌が見出されたのであろう。

4. 短歌の横書き出版は画期的

私がもっている短歌に係わる出版本は僅かではあるが，すべて縦書きである。とくに面白かったのは Donald Keene (著) 土屋 雅雄 (訳) 1994:「日本文学の歴史」古代・中世篇 1 (Seeds in the Heart, 1993 by Donald Keene, Henry Holt and Company Inc., New York の邦訳) では全文が和文で縦書きされている中で，漢詩や長歌や短歌の英訳までもわざわざ縦書きに組み込まれている。「NHK 短歌」でも投稿規程にはないが，横書き短歌は選ばないという選者がいるようである。

以上のことからも「海の研究」で短歌に係わる本論文が横書きで出版されることは画期的であり，日本海洋学会の機関誌だからこそ成し得たと思う。

References

川合 英夫 (1994): 黒潮と日本人の遭遇史 (第一部). 海の研究, **3**, 83–97.

川合 英夫 (1994): 黒潮と日本人の遭遇史 (第二部). 海の研究, **3**, 181–203.

川合 英夫 (1995): 黒潮と日本人の遭遇史 (第三部). 海の研究, **4**, 315–342.

川合 英夫 (1997): 黒潮遭遇と認知の歴史. 京大学術出版会, 355 pp.

Kawai, H. (1998): A brief history of recognition of the Kuroshio. Progress in Oceanography, **41**, 505–578. Pergamon Press.

川合 英夫 (1997): 黒潮と係わりがあった江戸時代の京都人. 京都大学広報, 513.

Oceanic Anthology

Hideo Kawai*

Abstract

Most of this article deals with an oceanic anthology of "Tanka", which is a traditional Japanese poem composed of five lines each having 5, 7, 5, 7 and 7 syllables, except for cases with extra or fewer syllables. This article is composed of three chapters: (1) an anthology composed and selected by the author, mainly related to fisheries oceanography; (2) an anthology of 54 poems related to the Kuroshio, all composed by various famous poets and classified into six categories; and (3) an essay entitled "Kuroshio and Japanese". Since composing "Tanka" oneself and evaluating those composed by others are both difficult tasks, my selection of "Tanka" in this article might be arbitrary. As far as "Tanka" that are related to fisheries oceanography or to the Kuroshio, however, my unique experiences hopefully make a contribution in describing human and social aspects of Japanese oceanography.

Key words : oceanic Tanka (traditional Japanese poem),
fisheries oceanography, Kuroshio, Kurose River,
human and social aspects

(Corresponding author's e-mail address : kawaihid@leto.eonet.ne.jp)

(received 22 February 2007; accepted 24 February 2007)

(Copyright by the Oceanographic Society of Japan, 2007)

* 131–81 Shibagahara, Kuse, Joyo, Kyoto Pref. 610–0102, Japan